

---

# 現実恋愛状況

雛蜜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現実恋愛状況

### 【Nコード】

N5111B

### 【作者名】

雛蜜

### 【あらすじ】

少し実話も入っている恋愛モノです。苦情等は受け付けませんが共感していただけたら嬉しいです。中学生ヒロインのまだまだ純粋な気持ちを表した切なく少し甘い物語。

## プロローグ（前書き）

苦情等は受け付けません。

## プロローグ

例えば私以外の誰かにとって、この想いがどうでもいい事だとしても。

周りの『おとな』にとって、くだらない事でも。

私にとつてのこの気持ちは苦しいくらいに愛しくて、

小さな体にとつて物凄く重い気持ちなの……

朝が始まればまた学校へ行く。ハッキリ言うと言きたい気持ちもあるが行きたくない気持ちもある。

現在中学生の私は、それぞれのいろんな部分にそれぞれの悩みを抱えている。恋愛・勉強・人間関係……。考えてしまえば学校なんぞに行きたくない気持ちに襲われる。

行きたいと思えるのは“あのヒト”に会える、と考えた時だ。

時間ギリギリで着替え始める。適当に朝食をとって身だしなみを整えて教科書が入った重いリュックと本が入ったサブバックを手に持ち、家を出た。

家から学校まで約30分。電車通学の私は電車に間に合うか間に合わないか、という時間に出たので少し走りが入った歩きで駅へと向かう。

——今日は間に合った。まあ、この電車に乗らないと学校に遅刻スレスレで着く事になるからヤバいんだけどね。

（もう来てるかな？来てたら絶対に挨拶しないとっ！！）

少しでも良い印象を与えるために挨拶は出来るだけしたほうがいい。笑顔で、爽やかに……。とあのヒトが来ている事を前提に教室へ続く階段を一段、一段上がっていく。

教室のドアは開いていた。来ている事を期待しつつも来ていない事を望みながら教室へ入る。

——いない。

「おはよう、奈々子。」

「あッ、おはよう！リーちゃん！！」

最近つるんでいるグループの中の1人、鈴島 りみ（スズシマリ）…通称リーちゃんに挨拶され挨拶を返す。

「美奈子もおはよう！」

近くにいた同じグループにいる高山 タカヤマ ミナコ 美奈子にも挨拶をする。

「ん、おはよう。まだ来てないよ。亮くん。」

「あー、うん…。」

私…山中 ヤマナカ ナナコ 奈々子の好きな佐々木 ササキ リョウ 亮の空席を見てガツカリしたのか安心したのかため息を漏らした。

——ため息したら幸せが逃げるんだった！！

何かの漫画に書いてあった言葉を思い出し、逃げた幸せを戻すように息を吸った。…私って単純。

そんな事を思いつつ、2人から離れ自分の席へと荷物を置きに足を向かわせた。

私の前の前の席にたむろしている松山 マツヤマ イズミ 泉のグループ…月下 ツキシタ シオリ 詩織 ヤマザキ ナツミ 夏美と浜崎 ハマザキ ナツキ 夏希にチラリと視線を向ける、と泉と目が合  
い睨まれた。

——ついこの前まで同じグループで楽しく話してたのに。

悲しくて、何か寂しくて、その事に悔しくて目を反らした。

その時、あのヒトが来た。

「あ、亮！！おはよう！！」

「よッ！！」

登校して来た佐々木に挨拶をする男子達。

佐々木が段々と近づいてくるのを目で追いながら気持ちを落ち着ける。

「お、おはよう佐々木!!」

「山中。おはよう。昨日はメール途中で止めちゃってごめんな。寝ちゃって...」

「いいよ!! 私もそう思ってたし、わざわざ相手してもらったんだから。」それに返って来ない時点で寝ちゃったんだ、って思ってたから。と言うと佐々木はアハハ、ごめんな。って笑った。

毎日メールを一件はする。そして一件は絶対に返ってくる。優しい佐々木は何でも聞いてくれる。泉達に陰口を言われたりした時も、嫌な思いが心にあるときも、恋が終わった時だって、ちゃんと聞いてくれた。慰めてくれた。共感してくれた。そこが、他の男子と違うところ。

私の好きになった佐々木の一番好きなところ。

# 1 聞こえてくるのは卑怯な陰口（前書き）

苦情等は受けつけません。

## 1 聞こえてくるのは卑怯な陰口

長々とした授業を頼づえをしながら聞く。ななめ前の男子の更に前の席…泉の隣の席に座る佐々木を見つめる。

佐々木は真面目だから、必死で黒板を移してる。偉いなあ、とか思  
いながら私の隣に座る天野<sup>アマノ</sup> 政和<sup>マサカズ</sup>に気づかれないよう微笑んだ。

そして、授業用ノートの下に隠していたノートに描かれた絵…漫画  
のような描き方で描かれた女の子…に手を加える。

そして、授業は終わる。

「ねえ佐々木。さっきの授業…ノート取ってある？」

「ん？ああ。」

「悪いんだけど見せてくれない？私書き終えてなくて。」

「いいよ。えっと…はい。」

佐々木が差し出したノートを受け取って、ありがとう。とお礼を言  
って席に戻る。

席に着いたら次の授業の準備をしてから佐々木のノートを広げて自  
分のノートに書き写す。

―…泉の視線を感じる。

まあ仕方ないけど。だって泉は佐々木が好きなんだもん。言っ  
てしまうと泉のグループの夏美だって佐々木の事が好き。夏美は泉に協  
力するとか言いながら自分も好き、だなんて凄い度胸だと思う。私  
も前は泉と同じグループだったけど佐々木を好きになったのはグルー  
プを抜けてからだから夏美とは違う。

ノートを書き写し終えれば、笑顔で丁寧にお礼を言って返す。佐々  
木は

「おお。」とノートを受け取った。何気ないやり取りが嬉しい、これは恋がどんなモノかを物語っている。

席に戻ると友達の美衣と亜美が話しかけて来た。

「奈々子頑張ったね〜!」

「ねえ、偉いぞ奈々子ツ!!」

2人とも私が佐々木を好きな事を知ってるし、泉達との事も全部知ってる。だから良き相談相手だ。美衣と亜美とは仲が良い。だが2人には既に2人のグループが出来ていてそれに無理やり入ったって無駄だ。だから、普通のお友達として付き合う。仲はいいけど仲が良すぎるとまでいかない関係。

こっちの方が深い友情関係よりも全然楽だ。美衣達が私の席から離れると、

「邪魔だよねー。」

という言葉が耳に入ってきた。

「ウザイよねー。」

「ホント。何でいるわけ?」

泉と詩織の声。どうせ私に向けて言ってるんだろう。先生とかに告げ口されるのが嫌だからあえて名前を出さない。卑怯な奴らだ。

くだらないけど、結構キツイ。心を何かで締め付けられてるように悲しい。ここから逃げたい。

でも逃げられない。

——何でそんな事言われなきゃいけないのよ。私何もしてないじゃない。何かしてるのはあんた達でしょ?

居心地が悪い。泣きたくなる。誰か助けてよ。くだらない事って分

かつてる。でも悲しいモノは悲しいのだ。私の心は確実に傷ついてる。

——傷ついたことがないからあんな風に言えるんだ。きっと自分達がやってる事がどれだけヒドいのか、なんて分かってないんだろうな。

チャイムが鳴って、泉達の陰口は聞こえなくなった。詩織は席に戻って行った。詰まりそうだった息は正常に戻る。

いつか詩織も泉も同じ目にあう時が来るから。気にしちゃいけない。私は大丈夫。そう心に言い聞かせて授業を受け始めた。

## 1 聞こえてくるのは卑怯な陰口（後書き）

うーん…ヒロイン可哀相です。次はヒロインの現在の恋愛模様が分かるようにしたいと思います！！次回も是非読んで下さいね（^^）

## 2 臆病者の恋愛模様（前書き）

苦情等は受け付けません。

## 2 臆病者の恋愛模様

今日は部活が無かった。私は、だけど。佐々木はサッカー部だから家に着くのは多分6時以降。私の学校は携帯の持ち込み禁止なので佐々木がメールを返せるのは6時以降ということになる。まだまだ時間がある。だから取りあえずメールをするのは少しおあずけ。パソコンを立ち上げてブログや夢小説のサイトを見る。

パソコンをしながらストレスを解消する。大好きな漫画のキャラクターの画像を掲示板とかで見つけて来て携帯に送ったり、好きなモデルさんのブログを見たり…時間がどんどん満たされる。ふと時計を見ると、7時。

——そろそろメールしようかな。

そう思って携帯でメールを打つ。迷惑になっちゃうと嫌なので、メール出来るとき返信して。と添えておく。送信し終わったら、よし。と呟いてまたパソコンへ向かう。

♪

「あ…。」

佐々木、だ。着メロが1人だけ違うからすぐ分かった。慌てて携帯を手に取りメールを開く。

嫌な事があったから話を聞いて欲しい。というメールに対しての返事はやっぱり、

『いいよ。どうしたの？』

だった。急いで返信を打つ。今日の陰口の事を全部打った。佐々木は泉達との現状を全部知っているから正直に全てを打つ。もしかしたら佐々木も聞いたかも知れない。泉の隣の席だもん。

ひと通り打ったら随分と長くなってしまった。佐々木なら最後まで見てくれるだろうから、長いまま送った。

」  
」

思ってたよりずっとずっと早く返信が来た。

私はまた急いでメールを開いた。

『そっか、山中も大変なんだな。俺、隣なのに全く聞いてなかった。ごめんな…。でも気にすることないと思うよ。』

何だかそのメールの内容にホッとした。今度はゆっくり返事を打つ。『ありがとう。元氣出た。そういえば今日、サッカー部でシュート決めてたね。さすが部長!!』

そして送信ボタンを押す。その後もやり取りが続く。

『見てくれてたんだ。サンキュー!。山中って細かい所見てるよな。』

『そうかな(笑)』

返信すれば返信が来て…。の繰り返し。それが10時まで続いた。

そして、途端にメールが返って来なくなる。また寝ちゃったんだ、と思いテレビをつけた。今から毎週欠かさず見ているドラマが始まる。時間的には丁度いい。

テレビを見ているとバレンタインのCMが流れた。バレンタインこそ愛の告白を!!なんて言っている。

「告白、か…。」

佐々木が好きだ。今の関係に満足している。でもやっぱり、もう一歩進みたい。恋人になりたい。それには私から気持ち伝えなきゃ。でも、

——フられてしまったら今の関係に戻るのかな。

佐々木は大丈夫だろうけど私がダメだ。今までみたいにはきつと戻れない。前に『恋愛に興味はない』って佐々木が言ってた事を思い出し、悲しくなる。

——それじゃあ両想いなんて無理じゃない。

フられた後の事を考えて、告白はやめよう…と思った。  
きつと佐々木は優しいから。

フたつていつも通り接してくれるだろうけど。  
やっぱりフられるのは、怖い。

私の臆病者。

伝えたくて仕方がないのに伝えられないなんて。  
私の気持ちが行き場をなくしてる、そんな気がした。

## 2 臆病者の恋愛模様（後書き）

切ない気持ちを表せましたかね？少しでもヒロインの気持ちを分かってくれたら嬉しいです。

### 3 holiday morning (前書き)

苦情等は受け付けません。

### 3 / holiday morning

今日は学校が休みだ。

思いつきり夜更かしした昨日、そして思いつきり寝坊した今日。既に10時を過ぎている。お母さんに起こられるかも、なんて思ったがそんな心配は不要だった。お母さんは朝から出かけていた。お父さんもとくに家を出ているし、妹もお母さんと一緒に出かけたのだろう。朝から元気な人達だなあ…。

つまり、家には私しかない。ペットの犬、ミントを除いては。軽くのびをして、ゆつくりと階段を降りる。

居間にあるコタツのスイッチを入れてからキッチンへと向かう。コーヒーを丁寧にドリップする。いつもならインスタントだが今日の気分は違つて、ちゃんとした淹れ方で淹れたモノが飲みたかった。インスタントはやっぱドリップ式で淹れたのよりもジャンキーな感じがする。ドリップ式の方がコクのあるしっかりとした味がして、違いは一目瞭然。ドリップ式で淹れたコーヒーに砂糖とミルクを入れて、居間に持つて来た。コーヒーを置いてコタツに潜り込む。のそのそとした動作でリモコンに手を伸ばし、テレビをつけるとバラエティン特集をやっていた。可愛いチョコがたくさん並ぶ高級菓子のお店を人気アイドルが紹介している。ふと、想いが頭をよぎる。

——チョコ位なら、あげてもいい…か、な？

チョコをあげた位でこの関係が崩れるわけがない。ならばあげたつて問題はないだろう。好きって言うわけではないのだから。何かしらの方法で気持ちを伝えれば、行き場をなくした気持ちも少しは楽になるかもしれない。

決めた。あげよう。

決意した後も私はのんびりと、チヨコはやっぱり手作りがいいよな  
あ。なんて考えていた。

材料の買い出し…いつ行こうかな。4日後はもうバレンタインだ。  
明日か明後日かに行かないと間に合わない。

そうだ。リーちゃんも誘おう。

明日じゃ急すぎるから明後日。

上機嫌でリーちゃんにメールを打った。

明後日、一緒にチヨコの材料の買い出し行かない？リーちゃんの返  
事は勿論YESだった。

気がつく結構な空腹状態だった。食パンをトースターにセットし  
に行く。今はこんな簡単な動作さえも面倒くさい。でも結局は空腹  
感に負けて、ふらふらとコタツから出た。

トースターがパンを焼いている最中、私は空を眺めていた。澄んだ  
青色の空には雲ひとつない。見ているだけで心地が良い。窓を開け  
て、また空を眺めた。サアツ…と風が通り過ぎ、目を閉じてそれ  
を感じる。冷たい、清らかな風。私は無意識に意識を飛ばしそうにな  
っていた。

…ガチャン！！！！

びっくりと肩が上がった。ハッと飛ばしかけた意識を取り戻して後ろ  
を振り返る。食パンが焼けたのだ。

「いちいち音が大きいんだもんなあ…。」

不満を口からこぼしながらも焼けたパンに嬉しい顔をしてしまった  
のが自分で分かる。冷蔵庫からマーガリンといちごジャムを取り出  
してコタツへと移動。足が軽い事から自分の食への思いがなんと  
な

コタツで足を伸ばし、トーストにマーガリンを塗り、ジャムを上からまた塗った。そして一口、かじり笑みを浮かべた。  
甘い味に満足してトーストを頬張る。

）  
）

かすかに聞こえた着メロ。佐々木からではない。佐々木以外の人が。…誰だろう？ 大事な食事タイムを邪魔され、足が重いまま携帯を取りに行く。

携帯のサブ画面を見ると受信メール一件。

「んー？ は…しば…羽柴？」

羽柴は同じクラスだがあまり喋らない。相性が合わない…のか、話しても楽しくないし、喋ろうとも思わない。メアドは教えてあるからメールが来たっておかしくはないけど…。何だろう、とメールを開いてその内容に目を見開いてしまった。

#### 4 バレнтаインデー（前書き）

苦情等は受け付けません。

## 4 バレンタインデー

『俺、お前からチョコ欲しいんだけど。くれない？』

「…はあ？」

何この図々しい内容。っていうかあんたにあげたら佐々木とか、他の人に勘違いされるかもなんですけど。それは困る。それに私から欲しいって…告白とかのつもり？意味分かんない。

『ゴメン、私本命いるから無理。』取りあえず断りのメールを打ち、送信ボタンを押した。

返事は、返って来なかった。

「ただいま。」

お昼頃、お母さんと妹が帰って来た。

「おかえり。どこ行ってたの？」

「近くのスーパー。お昼ご飯にたこ焼き買って来たんだよ。」

妹の小雪<sup>コユキ</sup>がたこ焼きの入った袋を突き出して言った。たこ焼きのいい匂いがする。

「美味しそう！！早く食べたい！！」

スキップの入った歩き方でたこ焼きの袋をコタツへ置きに行く。いい匂いに待ちきれなくて袋をあさり始めた。

羽柴からのメールの事は、既に私の頭から消えていた。それ程、深く気にしてなかったから。

バレンタイン当日。

リーちゃんと一緒に買いに行ったラッピンググッズで可愛くラッピングしたチョコを袋に入れて持って行く。放課後に渡すと決めたものの、朝からずっとドキドキしっぱなし。

「ねえねえ、チョコはどこで渡す気？」

「え…き、教室？ やっぱさ、さりげなく渡したいからねー…。」

へへ、と苦笑してリーちゃんを見る。リーちゃんは頑張ってるね、と応援してくれた。

刻々と時間が過ぎて行く。ああ…どうしよう、このホームルームさえ終われば放課後だ。ヤバイ、緊張してきた…。

「起立、礼。」

『さようなら。』

…うわ、来ちゃった。どうしよう…もうちょっと人気がなくなってから渡そう…、そう考えているとき

「佐々木、これあげる。」

泉の声だ。視線の先には泉が差し出したチョコらしきモノを佐々木が受け取っている。

「おう、サンキュ。」

そして泉はそそくさと帰って行った。…何か微妙な気持ち。

改めて好きな人がかぶってるって認識する。

そして自分が最近、泉とかの声に敏感になってしまった事に気づいた。

彼女だって1人の女。

当たり前前に恋だってするだろう。

相手がかぶってたとしてもおかしくはない。

私にどうこう言う資格なんてない。

佐々木はまだ残っている。人気もなくなってきた。そろそろ…渡そう。そして早く帰ろう…。

「さっ…佐々木…！これっ、あげる…。」

佐々木の目の前でチョコが入った袋を突き出した。佐々木は一瞬きよとん、としたがいつもみたく笑って

「ありがとう。」

と受け取ってくれた。

きゃーーーーっ…！！…渡せた！！受け取ってくれた！！…今ここで飛び跳ねそう！！…叫びそう！！…緊張した…ドキドキした…。でもきっちり渡した！！…

さあ、帰ろう…！！…と鞆を持つと、声をかけられた。

「おい、」

——羽柴。

#### 4 バレнтаインデー（後書き）

出来れば評価頂きたいです。

## 5 いきなりの告白・そして想い（前書き）

苦情等は受け付けません。

## 5 いきなりの告白・そして想い

羽柴に呼び止められた。

「ちよつと、こつち。」

…ついて来いと言う事だろうか。何？と聞いても羽柴は返事をしようとはしない。私はため息をつき、仕方なくついて行った。

「…で、何？」

羽柴が足を止めたのは一年生の教室のある四階つきあたり、視聴覚室の前だった。羽柴は私の質問には答えずに、制服のポケットから鍵を取り出した。多分、職員室からもらって来たのだろう。

「鍵…。」

「職員室で借りて来た。昼休み、生徒会の会議あったから忘れ物したって言うて。」

やっぱり。羽柴は副会長だから、先生もすんなり渡したんだろう。ガチャ、と鍵の開く音がした。

「入って。」

羽柴は私にそう言うて、電気のない視聴覚室に入って行った。私も渋々入って行く。

私が視聴覚室に入ると羽柴は視聴覚室のドアを閉めた。

…コイツ、まさか襲う気じゃないでしょうね。

私が警戒していると羽柴が気づいたらしく、顔をしかめて言った。

「何ビビってるわけ？」

「別にビビってないし。」

「ふーん。あつそ。」

「何で私をここに？」

私が聞くと、羽柴は言いにくそうな顔をして口を開いた。

「…お前さ、本命にあげたわけ？チヨコ。」

「何でそんな事言わなきゃいけないの？」

「渡したのかつて聞いてんだけど。」

「……渡したよ。」

「誰に？」

何で聞くかな……。私はため息をついてから羽柴を睨み気味に見て言った。

「そんな事言うわけないでしょ。羽柴に教える義務なんてない。」

羽柴は何か言いたそうだったが、ぐっと堪えたみたいだった。そしてすぐさま私に言った。

「……俺はお前が好きだ。」

「ハア？」

あまりにいきなりすぎて間拔けな声を出してしまった。

「何それ……そんな事言われたって……。」

羽柴は戸惑った様子の私の肩を掴んだ。

「好きなんだよ。付き合って欲しい。」

「いや……だから私には好きな人が……。」

「どうせ片思いなんだろ。じゃあいいじゃん……。」

「いいわけないでしょ……！」

私は羽柴の腕を振り払う。すると羽柴は彼の名前を口にした。

「……佐々木？」

「っ……！」

予想外だったから肩が上がってしまった。これじゃあ、佐々木が好きって言うようなモノじゃない……！！

「やつぱそうなんだ。お前、佐々木が好きなんだろ？」

「ち、違うッ……！何よ、私が誰が好きだろうと羽柴には関係ないでしょ……！」私はそう言って、視聴覚室を飛び出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n51111b/>

---

現実恋愛状況

2010年12月5日10時04分発行